

Title	静脩 Vol. 41 No. 1 (2004.7) [全文]
Author(s)	
Citation	静脩 (2004), 41(1)
Issue Date	2004-07
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/66049">http://hdl.handle.net/2433/66049</a>
Right	
Type	Others
Textversion	publisher



# 静脩

2004年 7月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 41. No. 1

## 図書館への想いをひとつ

第1回京都大学図書館協議会で

京都大学総長 尾池和夫

### 1. 京都大学図書館協議会ができました

京都大学図書館協議会という組織が発足し、歴史的な第1回の会合で、一言ご挨拶をさせていただこうということになりました。

昨年の秋、桂キャンパスが起動した10月から3つのキャンパスで京都大学の教育・研究が行われるようになり、それ以外の全国、海外にある組織とともに、それらをネットワークとしてどう考えていくかということが非常に大きな課題として存在しています。そこで11月頃部局長会議のもとに図書館検討ワーキンググループが設置され、金田副学長を主査に、図書館の体制の今後の在り方を全学的な立場から根本的に検討していこう、ということになったわけです。その結果、学内共通の課題を解決する機能の充実を目的として、京都大学図書館機構、そしてその会議の場である、京都大学図書館協議会を設置しよう、ということが提案され、部局長会議で了承されました。機構の方は規程を制定して発足する予定です。図書館協議会は4月に発足し、今回その第1回をお願いするわけです。

### 2. 図書館に期待すること

色々なテーマでこれから協議をしていただ

くわけですが、テーマの一つとして図書館が果たす機能というものがあります。

学内外からいろいろ期待されていますが、まずは学内の、さきほど申し上げた3つの大きなキャンパスの需要にどう答えていくか、教育・研究をどうやって支えていくか、これが本来の一番大きな課題であろうと思います。

例えば、桂キャンパスの学生、本部の学生両方にある、基本的な図書へのニーズにどう答えていくということも重要です。デリバリーサービスの整備は当然ながら、桂には工学系の方達がおられ、工学はオンラインのなじむ分野ですから、電子ジャーナルやデータベースを提供するオンラインシステムをどんどん開発し、実現していくことも必要かと思います。

それから、文化的な色々なことを支える機能も図書館にはあります。今年の5月26日にはご承知のとおり、メディア・コモンを開設し



ました。これはCDとかDVDとかを持ち込みでも見られる設備を整えたものとして、やっと実現したものです。それに伴って、昔から蓄えてあるビデオやレコードを視聴する環境を提供する機能が求められます。レコードをぜひ聴きたいという学生がおりまして、そういうニーズにも図書館はやっぱり応えて行かなければいけないと思います。同時に、レコードを大量に持っている方が亡くなる時期でして、そういう時にそれらの遺産を継承していくという役割が、大学に期待されるものの一つとしてあるわけです。そういうことを、いったいどう考えて行えばよいのか、と大変気にしています。

最近ですね、『三田評論』という慶應大学の雑誌記事執筆を依頼され、ちょうどその原稿を書いている時に金田一春彦先生が亡くなったので、日本語のことを書くことにしました。自然科学の間は英語の論文を書くことが当たり前になっていますが、英語論文を書いて評価をされて終わりになることがよくあります。子供の理科離れが言われていますが、自分が書いた英語の論文の内容を、一生懸命日本語で説明したことがあるのか、という反省をいたしました。日本語というものを、そういう視点で考えてみたのです。大学にいる科学者、特に自然科学の英語で論文を書くことを日常の仕事としている人たちは、これぞという成果を日本の子供達に、あるいは色々な意味で色々な世界の方達に日本語で伝えるべきです。先日、生存圏研究所のオープン式典がありましたが、「生存圏」という言葉は新しい造語です。そ



ういうものをHumanosphereと言ってすましておくのではなくて、「生存圏」という新しい学問分野を日本語でこれから広めていこうというような活動をする。このような教育宣伝活動も大学の役割だと思います。そして図書館にアクセスをすると、英語で評価されている論文の内容が日本語で読めるというように、そういう情報が大学になきゃいけないだろうと思いました。そんなことを少し書いてみましたので、また読んでみていただければ、と思います。

### 3. 著作権をどうするか

私としては、協議会でぜひ考えていただきたいことに、知的財産の問題があります。大学は知的財産をいっぱい持っているわけですが、著作権は、大学の所蔵する大きな知的財産で、これを一体どう考えるのかということが、図書館にとって特に大きな問題であろうと思います。

他人の知的財産を侵害し得る場面が図書館には想定され、全国で図書館の普及がどんどん進む一方で、作家たちが著作権侵害の訴えを起こしています。大学図書館も、著作権を

持つ人達に対して一体どう考えるのか、自館の考えをまとめておく必要があると思います。ヨーロッパでは公共貸与権、公共の利用に供するために無償で本を貸出す時それらの著作者が補償(金)を請求しうる権利、がかなり確立しています。このような、端的に言うと著作権を持つ人にお金を払うシステムが日本にはまだ確立していません。京都大学の図書館は、そ

ういうものをHumanosphereと言ってすましておくのではなくて、「生存圏」という新しい学問分野を日本語でこれから広めていこうというような活動をする。このような教育宣伝活動も大学の役割だと思います。そして図書館にアクセスをすると、英語で評価されている論文の内容が日本語で読めるというように、そういう情報が大学になきゃいけないだろうと思いました。そんなことを少し書いてみましたので、また読んでみていただければ、と思います。

ういう問題にリーダーシップを取って、どう答えるのか、考えをまとめておかなければいけないと思います。

また、その一方で著作権の切れた著作物もたくさんあります。日本では「青空文庫」というサイトが知られていますが、そこへアクセスすると著作権の切れた昔の本が無料で読める、こういう活用方法もあるわけです。電子図書館の役割であるかと思いますが、京大の持つ著作権の切れた財産を、そういう形でオンライン公開するということもこれからすすんでいくと思います。

#### 4.最後に

色々な問題が山のように出てくると思います。図書館機構を今年ぜひ立ち上げていただき、それと共に、この協議会で、一つ一つ丁寧に解決していただければ、という期待を持っています。図書館協議会第1回にあたりまして、私の想いの一端をご披露して、ご挨拶にさせていただきますたいと思います。

(平成16年6月10日、第1回図書館協議会での冒頭挨拶)

(おいけ かずお)

## メディア・コモン( Media Commons )がオープン

### 附属図書館3階に映像や音楽が楽しめる「メディア・コモン」が誕生

かつてのAVブースがメディア・コモンとして、5月26日に生まれ変わりました。

ガラス張りの広さ240m<sup>2</sup>のフロアに、DVDやビデオが見られる1人用ブースが16席、窓越しに時計台や吉田山を見ながらCDやカセットを聞くことができる1人用ソファが8席、50インチ大型プラズマ・ディスプレイで映像を楽しむことができる4人用AVコーナーが2カ所等合計32席があります。



さらに5.1チャンネルスピーカーを装備したメディア・シアター(防音装置付き、10席)などが配置され、本学文学部卒業生である故片田清氏寄贈のCDコレクション4,870枚のほか、DVDが約250点、ビデオ約760点などが利用できます。

#### 利用時間

平日 9:00~21:00  
土日・祝日 10:00~16:00

## 和算から洋算へ

大学院理学研究科教授 上野 健爾

和算は宋・元時代の中国数学をもとに江戸時代に独自の発展をとげた数学であるが、明治時代に入ると西洋数学にその座を譲ってしまった。本稿では、和算について、また京都大学附属図書館にある幕末の和算家佐藤則義の蔵書（佐藤文庫）から読み解くことのできる、和算から洋算への移行について簡単に述べたい。

### 和算家 佐藤則義

佐藤則義（のりよし、1820〔文政3年〕- 1896年〔明治29年〕）は幕末から明治にかけて活躍した和算家である。晩年は保左衛門（やすざえもん）と称した。備後福山藩の藩士であり、関孝和に始まる関流の数学を学んだ。佐藤則義が弟子に与えた免許状には関 - 荒木 - 松永 - 山路 - 藤田 - 神谷 - 内藤 - 伊達 - 佐藤と名前が書き連ねてあり自らも関流の数学者であることを自負していたことが伺われる。



佐藤 則義（日本学士院蔵）

佐藤則義は11才から数学の勉強をはじめ、弘化3年（1846年）に福山藩の算術肝煎、文久3年には算術世話取となり明治5年（1872年）に廃校になるまで福山藩の藩校誠之館（現在の誠之館高校の前身）で数学を教授した。嘉永二年

（1849年）には幕命に基づいて領海の深淺測量を行なっている。則義の蔵書の一部、117冊が則義の曾孫佐藤則之氏によって昭和27年京都大学附属図書館に寄贈され、佐藤文庫として保存されている。佐藤文庫はすべて写本からなり、佐藤則義が書写したことが記された写本や則義の草稿類、特に、和算から洋算への移行を示す貴重な草稿が含まれている。佐藤文庫に収録されている写本は『解伏題之法』のように関孝和よしすけに由来する数学書、松永良弼あじまなおのぶ、安島直円などの関流を代表する数学者の著作が多数含まれている。そのみならず、関流の藤田定資と激しく対立して最上流を創始した会田安明の著書の写しも含まれている。和算家の流派は他の芸道と違って流派の縛りがそれほど強くなかったことを意味している。佐藤文庫には、和算書以外に暦算、測量術に関する著作が多数含まれ、ニュートン力学に基づく砲術書も含まれている。暦算、測量術は和算家がつねに研究してきたものであるが、幕末の和算家はさらに広い興味を持っていたことを示している。和算は芸であったとよく言われるが、和算家は単に芸に遊んでいたわけではない。

### 異文化のるつぼの中で誕生した和算

織豊時代から江戸初期は、海外との交易を含めた経済活動が活発になり、そろばんが普及し、さらには築城や検地、河川の改修などに数学が必要とされた時代であった。この時代は、イエズス会の宣教師や南蛮貿易による西洋文化の流入、秀吉の朝鮮侵攻による朝鮮の文化と技術の輸入、中国や東南アジア交易による中国、東南アジア文化の輸入、そして茶の湯や能に代表される日本文化の発展と、たくさんの異なる文化が激しく渦巻き、互いに刺激しあっていた。そ

うした文化的状況を代表するのが角倉一族である。角倉は金融業から出発し、安南との朱印貿易によって巨利を得、河川の改修、運河の開削などの土木事業に投資する一方で、嵯峨本の出版などの文化的な事業にも巨費を投入した。



**塵劫記**  
(寛永11年刊 四卷六十三条本 第四巻 問題二)

江戸時代の数学興隆の基礎を作った『塵劫記』(寛永4年(1627年)初版)もまた、角倉一族の文化のなかで誕生した。著者吉田光由は角倉の一族であり、兄光長とともに菖蒲谷池を作り角倉隧道を開削する土木事業を行っている。『塵劫記』は多数の図版を取り入れ、嵯峨本の系統をひいている。『塵劫記』は当時の社会で必要となる数学をすべて網羅していたが、必要なことだけを学ぶだけでは教育効果が不十分であることを、光由は一族の教育の経験で熟知しており、多数の数学遊戯の問題が『塵劫記』には入れられていた。関孝和や久留島義太くるとしまよしひろなどの和算の大天才が『塵劫記』を読んで数学の面白さに目覚めたという伝説が残っているほど、『塵劫記』は魅力的な数学入門書であり、江戸時代を通してベストセラーとなった。

ところで、洋の東西を問わず、数学は文字式を自由に扱うことができるようになって本格的な発展が始まった。和算の文字式、傍書法は宋・元時代の中国で創始された天元術を発展させたものであり、関孝和によって創始された。天元術は中国では忘れ去られたが、朝鮮で保存された。元の朱世傑が1299年に著した『算学啓蒙』

は朝鮮で再刻され、秀吉の朝鮮侵攻で略奪品として我が国へ持ち帰られた。『算学啓蒙』の天元術を理解したのは大阪の数学者橋本正数と沢口一之のグループである。沢口一之による『古今算法記』の中に提出された解答をつけない問題(和算では遺題と呼ぶ)を解くために、関孝和は文字式(傍書法)を考案し、連立高次方程式の変数を消去するために行列式の理論を世界に先駆けて展開した。その結果は1674年に『癸微算法』として出版され、ここに中国数学を超えて真の意味での和算が誕生した。

### 徂徠の和算批判

17世紀後半から18世紀にかけて、関孝和と弟子の建部賢弘をはじめとする多くの和算家の活躍によって和算は本格的に発展していった。今日、整理するのも不可能なほどおびただしい数の和算書が日本各地に残されている。また、神社仏閣に、数学の問題とその解法を記した絵馬(算額)が多数奉納された。たくさん人が集まるところに数学の問題とその解答を示すことで、学術雑誌に近い役割を算額は果たしていた。

ところで、和算書でも算額でも、図形の問題、特にピタゴラスの定理を何度も使って高い次数の方程式に帰着される問題がたくさん取り扱われている。ごく少数の例外を除いて問題のための問題、遊びのための問題である。遊びなくして文化は存在しないが、こうした和算家の態度を荻生徂徠は『徂徠学則』の付録の中の「西肥の水秀才が問いに對ふ」で批判している。

「数学も亦、不佞未だこれを学ばず、然れども今の数学者流を觀るに、種々奇巧を設け、以て其の精微を誇る、其の実は世に用無し、故に古法必ず簡ならんことを知る。且つ円率の如きは、乃ち方を積みて以て之を測る、積みて数万に至ると雖も、亦数万の微塵弧の算に入らざるあり、豈に円率と為るに足らんや、」(『荻生徂徠』、日本思想体系36、岩波書店、1973年、p. 514)

後半の円周率の計算にかんする批判は、湯浅

常山の『常山楼筆餘』巻三にさらに詳しくでていて、極限に関係して、哲学的にも大変興味深い問題であるが、徂徠も初歩的な観点で止まってしまっ、議論は深まっていない。

優れた和算家は徂徠の「其の実は世に用無し」という指摘を認めざるを得なかった。しかし、奇問、難問を作り解くことは、多くの和算家と和算愛好家にとっては楽しみであった。徂徠の批判にもかかわらず、各地でたくさんアマチュア数学者が活躍し、江戸時代の和算を支えていた。

藤田貞資(1734 - 1807)は『精要算法』の中で、数学には「用の用」、「無用の用」、「無用の無用」があり、いたずらに問題を複雑にして、奇巧をこらすことは「無用の無用」であり弊害がおおきい、そのような問題はこの本では扱わないと宣言している。しかし、最後の巻では複雑な図形の問題が登場する。もちろんこうした問題が無意味なわけではない。藤田貞資は図形の問題で、ある場合には負の根をもつ2次方程式が登場することに気がついた。かれはこの負の根のもつ意味を考えたが分からず、安島直円(1732 - 1798)に質問した。負の根は類似の問題、それはもともと内接円の問題であれば外接円に設定を変えた問題の答えと関係すると言うのが安島の解答であった。負の根に意味があると考えた藤田の態度は数学者として自然であり、安島の解答は数学的思考の醍醐味を語ってくれる。和算がその根本で今日の数学と何ら異なることがないことを示すエピソードでもある。

「無用の無用」が「無用の用」となり、ある日突然「用の用」となることがあることは数学の歴史が示している。有用性、必要性だけを追求しては不十分であることは『塵劫記』でも既に示されていたことであった。国立大学を法人化して、「無用の用」までも排除しようとする今日の日本の社会に未来がないことは、こうした歴史を考えただけで明らかである。

## 江戸の文化を支えた教育

江戸時代後期になると日本全国に和算の愛好者がいて、問題を作り解くことに熱中した。幕藩体制は結果として地域文化の発達を促した。地域文化の振興に貢献したのが寺子屋を初めとする江戸時代の私的な教育制度であった。多くの地方に数学が花咲き、それが、明治時代になって大きな力となった。比較的裕福な農村地帯で、どのように教育が行われていたかを示す例として田村吉茂が著した『吉茂遺訓』の冒頭の現代語訳を引用しよう。

「私は寛政二年(1790年)十月十日の生まれである。成長するにおよんで、貧しいながらも親は私の将来を考え、手習いをさせるために寺子屋へいくようにいい聞かせた。しかし、生まれつき手習いはきらいであったから、返事もしないでただ黙っていた。そこで、親もしかたなく家で習わせようといったが、それさえもしなかったのである。あるとき母から『お前のような手習いのきらいな者は、こじきになるほかはない』と叱られたことがある。

.....

ところで、ちょうど十八才になった年の暮に、村内に住む祖父と叔父から『今度算術の先生が村へ来て若者に算術を教えるらしいが、お前も習ったらどうか。費用はこちらで出してやろう』と説得された。そのとき私はこういって断った。

『たいへんありがたいお話しですが、私はこの年まで手習いもしないで過ごしてきましたので、今四十日くらい算術の稽古をしても、とてもそれを理解することはできないと思います。師について学びながら理解することができないのではかえって恥をかくことになりまますから、ご親切に背くのは非常に心苦しいのですが、どうかお許し下さい』。これには祖父も叔父も『もったもなことだ』と納得された。以後は全く無筆無算の免状をもらったも同然で、農業にのみ精励してきた。』(『吉茂遺訓』日本農業全書第21巻、農文教、1981年、p.211-212, 泉 雅博訳) このように記しているが、田村吉茂は『農業自

得』、『農業根源記』などの優れた著作を残しており、また残された晩年の書は見事なものである。さらに、吉茂は『吉茂遺訓』の中で「身を持ち崩す原因となる小道楽」として「生ま算法者」をあげている。吉茂がわざわざ記すほどに、江戸時代後期には、数学愛好家が農村部にまで広がっていたことが分かる。

### 和算から洋算へ

こうした地方での数学の興隆は明治維新後にその力を発揮することとなった。明治5年に政府は初等教育の数学に洋算を用いることを決定し、和算の衰退は時間の問題のように思われたが、実際には和算は明治時代になっても多くの人に学ばれ、神社には算額が掲げられた。学校教育では教科書が必要とされたが、明治政府は教科書を用意する余裕はなかった。このときに、各地で独自の初等数学の教科書が作られた。

珠算の計算を筆算に直

す必要があったにせよ、

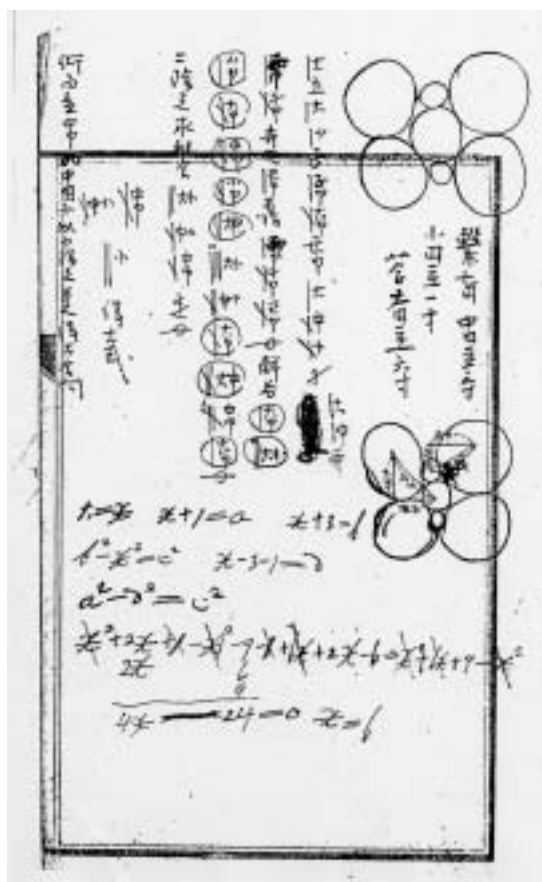
数学の内容に関しては江戸時代の経験は十分に活用することができた。佐藤則義の息子佐藤武太郎は小学校教員のために村上常と共著で明治6年から10年まで5編10冊からなる『筆算指南速成』を出版し、出版人の一人として佐藤則義が名を連ねている。また、佐藤文庫に含まれる写本の表紙に使われた台紙には筆算の計算が記されているものがある。佐藤則義も、自ら筆算を練習したことが分かる。それ以上に目を引くのは「算法浅問抄解」と題されたノートである。『算

法浅問』という和算書の問題の解答を記したこのノートには、傍書法を使って問題を解いた上に、アルファベットを使って方程式をたてて同じ問題を解いたページがある。表現法は全く違うが、方程式は本質的に同一である。このように、和算家にとって西洋数学を学ぶのは方程式に関する限りそれほど難しくなかったことが分かる。しかし、微積分学のように、関数概念や極限の概念を必要とする数学は、概念の理解が難しかった。特に、西洋数学が論理の基づく概念操作を多用し、理論を論理的に把握する方向へ進んだのに対して、和算は漢字文化圏の出来事として問題を解きながら納得する理解の仕方をその基本としてきた。また、和算家はソロバンを駆使して数値計算は得意であったので、結果の成否は数値計算に基づいて判断することも可能であった。そのような意味では、コンピュータ時代の現代と直結する側面も持っ

ていたが、一方で理論を論理的に展開することは不得手であった。

幕末から明治初期、軍事技術、そして工学の輸入のために西洋数学が必要とされたが、それを比較的簡単に消化できたのは、和算の成果が広く普及していたことにある。その一方では、応用数学と純粋数学とが別個に輸入され、和算家が有していた応用への関心は受け継がれることはなかった。このことが我が国の数学の進展に大きなゆがみを与えたことは忘れてはならない事実である。

(うえの けんじ)



算法浅問抄解



## 幕末の数学者 小野友五郎

### 日本の近代化を促した幕臣と和算家

作家 鳴海 風

#### 1. はじめに

私は時代小説家で、現役のエンジニアでもある。エンジニアが時代小説を書くと、どうしても史実にこだわりがちである。小説はフィクションが多いほど面白いのだが、エンジニアの習性はデータ（史実や証拠）を求める。データが集まって、一般に理解されていることと異なる歴史が浮かび上がってくると、それを書かないではいられなくなる。人間の真実の姿と同時に真の歴史を描くのが、時代小説家の使命であり、私には生きがいである。



#### 2. 明治維新の虚像

明治新政府は、明治4年(1871)11月、欧米の制度や文化を学ぶために岩倉具視(46歳)を全権大使とする欧米視察団を派遣した。近代化という点で、日本は欧米に著しく遅れていたからだという。ところが、彼らが帰国する明治6年(1873)9月までに、近代化の主要な施策(電信事業開始、郵便制度施行、鉄道開通、学制公布、ガス灯設置、太陽暦採用等々)はほとんど実を結んでいた。

ペリーが黒船で浦賀に現れたのは、嘉永6年

(1853)6月である。幕府はただ周章狼狽(しゅうしょうろうばい)しただけとされるが、実は、長崎のオランダ商館長から『別段和蘭風説書』で予告を受けていた。鎖国にこだわった結果、アヘン戦争で辛酸をなめた清国のことも知っていた。

筆頭老中の阿部正弘(あべまさひろ)(34歳)は、身分に関係なく広く意見を求め、人材抜擢に努めた。海外渡航をさせないための<大船建造禁止令>を解除するとともに、浦賀奉行所に洋式帆船の建造を命じた。かねてより遠洋航海に適した堅牢なキール(竜骨)構造をもつ洋式帆船を研究していた浦賀奉行所では、与力の中島三郎助(なかじまさぶるうすけ)(32歳)をリーダーとして、8ヶ月後に鳳凰丸(ほうおうまる)(全長36.4m、排水量550t、砲10門)を進水させた。また、オランダに蒸気軍艦発注も決めた(最初に入手したのが咸臨丸(かんりんまる)である)。

翌年正月、ペリーは2度目の来航をした。幕府は日米和親条約を締結し、下田と箱館の開港を約束した。鎖国は終焉(しゅうえん)した。以後、イギリス、ロシア、オランダ・・・と次々に条約を結ぶことになる。諸外国との条約締結は、外交を活発にさせた。幕府が崩壊するまでの海外使節の総数は、のべ18ヶ国約320人、留学生の総数は、のべ4ヶ国約80人にもなる。

#### 3. 幕末の数学者 小野友五郎

小野友五郎(おのともごろう)は、文化14年(1817)、笠間藩(かさまはん)士の家に、四男として生まれた。年に2両1人扶持(ほつろく)というきわめて俸禄の少ない家だったから、普通なら一生冷や飯食いで妻帯すら望めない境遇である。しかし、彼は和算(日本式の数学)ができたので養子口が見つかり、やがて江戸勤務も回ってきた。その頃江戸には、長谷川

道場という有名な数学塾があり、彼はそこへ入門し、めきめき頭角を現し、笠間藩の算術世話役にも任命された。

友五郎の際立った数学の力に目を付けたのは、品川台場や伊豆に反射炉を築いた江川太郎左衛門（英龍）である。江川は友五郎を蕃書和解御用に推薦した。彼はそこでオランダの航海術書の翻訳に従事した。それは『渡海新編』としてまとめられ、その高い評価から、長崎海軍伝習所（図1）の一期生に抜擢された。



図1 陣内松齡画

「長崎海軍伝習所及出島和蘭屋敷」（鍋島家旧蔵）

長崎海軍伝習所は、海軍力の整備こそ焦眉の急と判断した幕府が、オランダの提案を受け入れて創設したものだ。講師陣はオランダ海軍の軍人を招いた。伝習所では航海術、造船法、砲術などを教えたが、それら技術の基本は数学にあった。友五郎は伝習生の中では最も和算ができたから、初めて学ぶ西洋数学についても卓越した理解力を示し、彼だけは特別に微分、積分まで教えられたという。

江戸から長崎への遊学は、今なら海外留学に当たるだろう。友五郎は妻帯していて38歳だったが、まだ子供に恵まれていなかった。妻を一人残しての長崎行き的心境は複雑だったに違いない。しかし、異国情緒あふれる長崎での生活には、色々な人との出会いがあったはずだ。彼を支えてくれた女性がいたかもしれない。史実を追求する過程で得られる想像の世界であり、小説にすると、時には史実よりも説得力が備わることがある。

やがて伝習生に太平洋横断の機会が訪れた。これは、日米修好通商条約の批准書の交換をアメリカの首都ワシントンで行うために、日本から正式な使節をアメリカへ送ることになったのだが、使節らがアメリカの船で行くなら、日本からは随伴船を仕立てようという計画が生まれたからだ。友五郎は早くから乗組員に選ばれ、随伴船は咸臨丸に決まった。

渡航の責任者である軍艦奉行の木村喜毅（30歳）は、この古今未曾有の冒険航海を成功させるために、アメリカ海軍の軍人らを同乗させることにした。ジョン・M・ブルック大尉（34歳）ほか10人である。日本人だけで太平洋を渡りたいと主張する人々からは大いに反感を買ったが、木村の判断は正しかった。37日間の航海は悪天候続きであった（図2）。艦長の勝麟太郎（海舟、37歳）は、出航前の過労から体調を崩して、航海中はほとんど船室から出られなかった。多くの船員たちも船酔いで倒れていた。

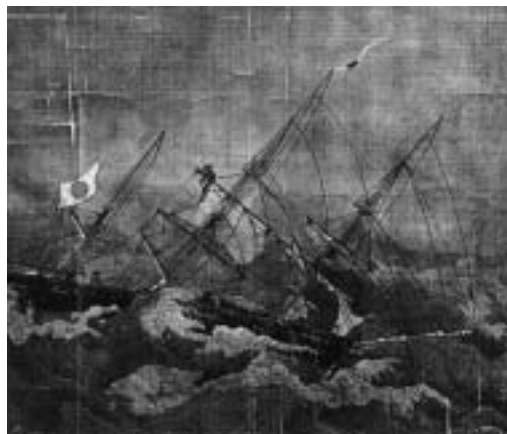


図2 「悪天候下を進む咸臨丸」鈴藤勇次郎筆

そのような中、アメリカ人らと力を合わせて操船したのは、航海長役の友五郎を始めわずか数人の日本人だけだった。その中に、通訳として乗船していたジョン・万次郎（33歳）がいる。万次郎は、漂流してアメリカの捕鯨船に救われ、10年間後に帰国した男である。彼は、アメリカで高等教育を受け、きわめて優秀な成績を残していたし、捕鯨船員としては一等航海士に匹

敵する実力を持っていた。

こうして、何とかサンフランシスコに着いたが、荒海を乗り切った咸臨丸は損傷が激しく、メーアアイランドの造船所で膨大な修理を必要とした。しかしそれは、友五郎らにとって、ドックでの修理や近代造船法を学ぶ良い機会となった。また、修理の合間にも、電信の早さ・便利さに驚いたり、ガス工場や製鉄所をつぶさに見学したりした。図4はサンフランシスコで撮影した咸臨丸乗組員で、右から小野友五郎、赤松大三郎(19歳)、勝麟太郎である。



図3 ジョン・M・ブルック大尉とジョン万次郎



図4 サンフランシスコでの3人  
(ジョージ・M・ブルック2世所蔵)

一方、アメリカが用意したポウハタン号で遅れて到着した正使ら77人は、ワシントンへ向かい、ブキャナン大統領に謁見し、批准書の交換も無事終えた。使節の中でも<sup>かんさつやく</sup>監察役の旗本<sup>お</sup>小栗忠順(33歳、図5)は、その毅然とした交渉態度が非常に注目された。使節はその後、大西洋を渡り、<sup>きぼうほう</sup>喜望峰を経てインド洋に出、バタヴィア、香港を経由して帰国した。ほぼ世界一周の旅を経験した小栗は、欧米の強大な海軍力を目の当たりにし、西洋文化や合理的な諸制度を吸収した。国際感覚を身につけたのである。



図5 小栗忠順  
(万延元年(1860)ワシントン ウィラードホテルで撮影)

小栗忠順はのちに名勘定奉行<sup>かんじょうぶぎょう</sup>(今なら財務大臣に相当)小栗上野介<sup>こうずけのすけ</sup>として知られる。帰国した友五郎は、小栗の壮大な近代化構想の下で、さまざまな仕事をする。蒸気軍艦建造を提案し、自ら設計した<sup>ちよだがた</sup>千代田形を完成させた(図6)。純国産である。また、咸臨丸の艦長として、当時外国人が居住していた小笠原諸島回収のため、測量調査にも出かけた。また、小栗と共に横須賀に大規模な造船所建設を企画した。その建設工事は明治になっても継続され、1号ドックが完成したとき、それは東洋一の規模であった。現在も横須賀米軍基地内に遺構が残っている。



図6 千代田形  
(福田一郎ほか『写真日本軍艦史』より)

開国はしたが、日本の海軍力は弱小である。日本の安全は、当面、外交努力で維持しなければならない。その間に、できるだけ早く富国強兵策を推し進めるのだ。友五郎は、小栗ら幕府の考え方を最も理解したテクノクラート（技術官僚）として活躍し、幕末には勘定奉行並（財務副大臣相当）にまで昇進するのである。

ところが、薩摩藩や長州藩は過激な攘夷行動をとり、幕府の足を引っ張り続けた。有名な生麦事件は薩摩藩が犯したものだし、朝廷の命令で攘夷決行の日に砲台から外国商船を砲撃したのは長州藩である。そのたびに幕府は、外交と賠償金で全面戦争を回避した。植民地化される危険を知らずに列強を刺激し、内戦まで仕掛けてくる薩長の行動に、友五郎は憤りと悲しみを覚えた。

やがて、薩英戦争や馬関戦争に完敗した薩長は、ようやく攘夷行動の無謀さを悟るが、幕府に向かって振り上げたこぶしの降ろしどころがなく、今度は攘夷から倒幕へと発散するエネルギーを変質させていった。

明治に改元される前年にあたる慶応3年(1867)の1月、友五郎は軍艦購入の正使として2度目の渡米をした。ワシントンでは、ジョンソン大統領にも謁見した。半年後に帰国すると、オランダへ留学していた榎本武揚(31歳)らも、オランダ製の巨艦開陽丸で帰国していた。また、小栗らはフランスの陸軍が世界最強であるとの認識から、新たにフランスから軍事顧問団も招聘していた。それでも、既に幕府の命運はききようとしていた。

将軍徳川慶喜は大政を奉還し、天皇は一部の公家と薩長に奪われた。クーデターが発生したのだ。幕府軍(友五郎含む)は天皇を奪い返そうとするが、岩倉具視らの偽装した倒幕の密勅や錦の御旗のために、ひるんだり裏切りも出たりで、結局敗走することになった。

江戸城での大評定で、戦えば負けることはない、と小栗は最後まで主張した。その拠り所は、これまでに整備した海軍力にあった。この時点

で、幕府が擁する蒸気軍艦は9隻、備砲93門。蒸気帆船は19隻、洋式帆船は16隻と薩長海軍を圧倒していたからだ。しかし、慶喜の戦意は既に消失していた。小栗はすべての役職を罷免された。

ようやく江戸へ戻ってきた友五郎には勅諭による処罰が待っていた。友五郎が収監されている間に、小栗は知行地上州権田村で官軍の手により何の取調べもなく斬首された。

#### 4. おわりに

幕末から明治にかけて、日本が植民地化される危機を救おうと死に物狂いで活動したのは、必ずしも西南雄藩の志士だけではない。徳川幕府の内部にも体制を変革し、開国と外交努力によって、清国の二の舞にならないようにと心を砕きつつ、近代化を進めた人々が多くいたのである。

執筆のための取材を通じて、その事実に気付いた私は、どうしてもその人たちのことを書きたい、書かねばならないと思った。

小野友五郎は、明治になってから、再三海軍から出仕要請を受けたが断った。それは、技術屋で謙虚な彼にしては珍しいほどのかたくなさで、わずかに鉄道敷設のための測量に従事しただけである。一方、数学者としての小野友五郎の、その後を見てみると、明治10年(1877)には、日本数学会の前身である東京数学会社の最初の社員になっているし、依然として長谷川道場の権威者としても名を列ねていた。洋算、和算ともに変わらぬ情熱を注いでいたのである。

#### 【参考文献】

土居良三著『咸臨丸 海を渡る』(未来社)

村上泰賢著『幕末開明の人 小栗上野介』

(群馬県倉渕村 東善寺)

鳴海風著『怒濤逆巻くも』(上)(下)

(新人物往来社)

(なるみ ふう)

# 谷村文庫蔵『萱草』『賦何船連歌』管見 連歌師宗祇 文明のころ

日本学術振興会特別研究員 長谷川 千尋

## はじめに

宗祇は、日本の中世後期における古典文学の権威であり、連歌史上の最高峰と称される人物でありながら、その前半生はよくわかっていない。生まれは応永二十八年（1422）後年、『浅茅』の中でみづから回想しているところによれば、三十余歳で連歌の道に志したらしい。当時としてはかなり遅い出発である。現存作品を見ると、三十七歳の康正三年（1457）『賦何路連歌』に、ようやく宗祇の名が現れる。以後、師の専順や心敬らの連歌の座に連なっている。文正元年（1466）には都から関東方面に下り、各地で七年の歳月を送る。この間に上京することもあったが、再び都での生活を始めたのは文明五年（1473）、五十三歳の秋の頃であった。そして驚くべきことに、一、二年のうちに都の貴族達にその実力を認められ、後土御門天皇の目にとまる程の存在になってゆく。この時期、宗祇の置かれていた文壇上の立場はどのようなものであったのだろうか。ここでは、附属図書館谷村文庫に蔵される『萱草』、『賦何船連歌』の二点 いずれも古写本であるとともに伝記資料としても貴重なものである を紹介しながら、文明六～九年頃の宗祇を追ってみたい。

## 1 『萱草（わすれぐさ）』

文明五年（1473）に東国から帰洛した宗祇が第一に成したのは、自選句集『萱草』六巻であった。この『萱草』には、文明六年二月下旬の、以下のような奥書が備わる。

奥書 A 此一帖者、連歌好士宗祇以自句編集之、誂青蓮院准后加清書、於外題宗祇依所望染禿筆者也

于時文明六年夾鐘下澣、書之

ここから、『萱草』本文の清書は、青蓮院准后尊応に依頼されたことがわかる。『萱草』所収句の詞書によれば、宗祇は青蓮院主催の月次連歌会に参加して発句を詠んでいるから、尊応とは交渉を持っていたのである。一方、『萱草』の外題を染筆し、奥書 A を記した人物の名前は記されていない。奥書 A の執筆者については、足利義政、一条兼良、二条持通に比定する説がある。

ところが、谷村文庫本『萱草』(4 - 24 / ワ1 貴)には、上記の奥書に続けてさらに次のようにある。



『萱草』奥書

奥書 B 此一冊、彼好士依懇望難黙止、  
加愚筆之处、式部卿宮被覽之次、  
令録右奥書給而已

于時文明第六關逢敦胖歳沽洗下  
一候、記之 北麓野叟

この奥書Bの文面は、「この一冊（萱草）は、彼好士（宗祇）の懇望を黙止しがたく、私の拙い筆を加えましたところ、式部卿宮が御覧になるときに、そのいきさつを記すよう命ぜられて、私は右の奥書（A）を書いたのです」という意味に理解できる。すなわち、奥書Aは、式部卿宮貞常親王のために「北麓野叟」が記したものであることがわかる。この「北麓野叟」と名乗る人物は、貞常親王の命を受けて奥書を記し、親王に敬語を用いていることから、將軍足利義政であるとは考えにくい。何より「北麓」の語に注目する必要がある。当時、比叡山の麓、岩倉長谷の地には聖護院の山荘があった。門主の道興准后と宗祇は、すでに文明四年に美濃で連歌の座を共にしており、「北麓野叟」とは道興である可能性が高いと思われる。

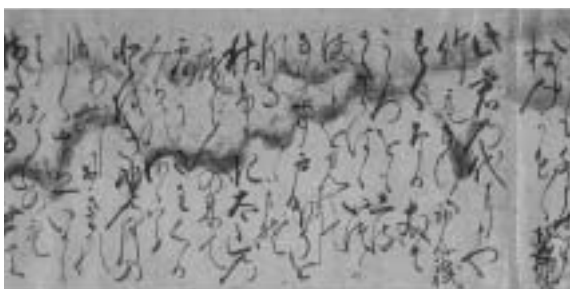
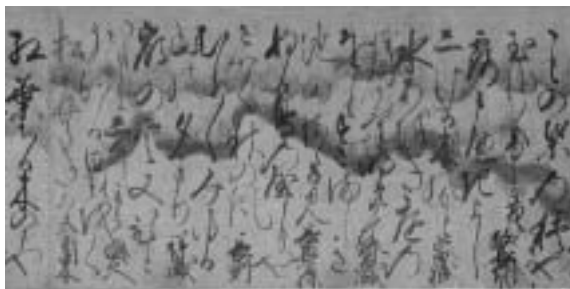
『萱草』は、このようにして、宗祇の帰洛後間もない文明六年二月に、貴顕によって清書され、貞常親王の閲覧に供せられた。そして、この年の八月には、後土御門天皇に進上するための「宗祇三十句連歌」を、三条公敦が山科言国に書写させている（『言国卿記』）。言国は、翌文明七年四月にも「宗祇沙汰ノ連歌」を書写している。この度は書写に三日をかけ、三条公敦と二人で校合した上で天皇に進上している。天皇はお喜びになり、「イマイチドキヨウガウシテマイラセヨ」と仰せになったと言う（『同』）。この「宗祇沙汰ノ連歌」は、『萱草』であるとも、まだ草稿段階にあった『竹林抄』（後述）であるとも言われている。

## 2 種玉庵造営と『竹林抄』

文明八年（1476）宗祇は、西洞院正親町にあった入江御所（三時知恩寺）の南に、種玉庵を造営する。ここは明応九年（1500）に焼失す

るまでの三十年間の宗祇の栖であり、公武の人々が集う文化の拠点となる。

その種玉庵の草庵開きの晴れの催しを伝えるのが、谷村文庫猪苗代家本『賦何船連歌』（猪ノ4 - 24 / カ3 貴）である。青と紫の打疊の料紙を用いた連歌懐紙（卷子本に改装）で、端作に「文明八年四月廿三日」と興行の日付が記されている。



### 『賦何船連歌』初折表、三折表

管領畠山政長の発句「ことの葉の種や玉さくふかみ草」は、庭前の牡丹花（ふかみ草）を褒めると同時に、「種玉」（漢の羊公が、その篤行によって石を植えて玉を得たという『搜神記』の故事に基づく）の語を読み込み、種玉庵における文事の発展を祈念する。宗祇も「露さへきよししげる木のもと」の脇句で応じ、政長の庇護に対して感謝の意を表している。宗匠は、幕臣の杉原賢盛が務め、その他に公家の長興宿禰、政長の家臣や時衆の僧など総勢十三人の連衆が集まった。しかし連歌の会席自体は、政長の「いつも千とせの松のかずかず」の祝言句で結ばれ、五十韻で切り上げられている。貴顕を迎えての会は早々に酒宴へと移行したのであろうか。残りの五十韻は宗祇の独吟となっている。

この会の一ヶ月後には、『萱草』に続く第二の取り組みである『竹林抄』十巻が完成する。『竹林抄』は、中国の竹林の七賢にちなんで、先達七人（宗硯・智蘊・能阿・専順・心敬・行助・賢盛）の連歌を編んだ撰集である。その中に、結庵して間もない種玉庵で詠まれた発句が二つある。

宗祇草庵を結びて始て一座侍し時

茂れなを代々の言葉の園の竹 賢盛

ここでは、詞書に「草庵を結びて始て一座侍し」と断っているの、先に見た文明八年四月二十三日の会は公的な意味での草庵開きであり、賢盛を迎えたこちらの会が、まさしく最初の張行であったと考えられる。発句の季は「竹茂る」により夏で、同年四月の張行となる。『竹林抄』の序文は、文明八年五月二十三日に奈良の一条兼良に依頼されている（『大乘院寺社雑事記』）。その頃には編集作業もおおかた終え、完成を間近に控えていたと見る事ができるから、この草庵開きの発句は、ぎりぎりの段階で採録されたことになる。種玉庵で詠まれたもう一つの発句は、暮春の句である。

宗祇草庵にて千句侍しに、暮春の心を

花落て鳥鳴く春の別れ哉 賢盛

この句は、『竹林抄』の成立を文明八年五月頃と推定すると、文明八年三月以前のものとなる。しかし、四月の草庵開きよりも前に、それも千句のような大がかりなものが張行されていたというのはいかにも不自然である。或いは「宗祇草庵」は種玉庵造営以前の、別の草庵であろうかと疑われる。ところが、この句に関しては、兼載からの聞書である『竹聞』に、次のような注が付されている。

此時ノ千句ノ発句、載第一春八まだあさ  
日色こき霞哉、祇第九花ヲノミ待事ニス  
ル老木哉

この時の千句の巻頭百韻の発句は兼載が任され、第九百韻の発句は宗祇が詠んだという。兼載の発句「春はまだ朝日色こき霞哉」は、彼の句集『園塵 第一』発句部の巻頭をかざっている（宗 硯

の発句の方は句集類に収められていない）。その詞書には「文明九年春種玉禅老の庵にて」とある（「文明十九年」とする諸本もあるが、賢盛は文明十七年に没しているから、十九年はあり得ない）。この詞書に従えば、賢盛の「花落て鳥鳴く春の別れ哉」の句は、やはり種玉庵で詠まれたものであり、草庵開きの翌年、文明九年春の発句となる。

ただ、そうすると『竹林抄』成立の文明八年より後の句が採録されていることになる。この点については、『竹林抄』の諸本に句の出入りが多く、諸本の調査にあたった両角倉一氏が、『竹林抄』は宗祇による数度の改修を経ており、成立の時期は流動的に見るべきだと述べていることを参考にしたい。賢盛の文明九年春の発句は、むしろ『竹林抄』の補訂がこの頃まで行われていたことを証明するものであるという見方もできよう。

ちょうどその頃、あるいは補訂後であろうか、文明九年二月二十日に、三条公敦が『竹林抄』冬部の書写を三条西実隆に依頼している（『実隆公記』）。前述した「宗祇三十句連歌」や「宗祇沙汰ノ連歌」も公敦の指示のもとで天皇に進上されていたことから、この場合も、進上本書写の一環であったかもしれない。

### 3 『竹林抄』撰集の意図

宗祇が『竹林抄』の序文を一条兼良に依頼したのは相応の理由があった。兼良には、『菟玖波集』の後を承ける准勅撰連歌集の計画があった。『新玉集』二十巻一万句であり、宣旨を待つばかりにまでなっていたというが、惜しくも応仁の乱の戦火によって焼失し、挫折してしまふ。宗祇は、兼良とは早くから交渉を持っていたから、その無念さは直接聞かされていたであろう。また、かつての『菟玖波集』の撰進や「応安新式」の制定は、二条良基と地下の救済の協力によってなされたが、『新玉集』「新式今案」における兼良の協力者は、宗祇の師、宗硯であった。しかし応仁の乱のさなか、宗硯は

既に亡く、先輩にあたる代表的な連歌作者は、あるいは没し、あるいは地方に下向していた。そのような状況で、宗祇は准勅撰連歌集の計画に地下連歌師として尽力することを決意し、『竹林抄』を撰定したに違いない。兼良もその意をうけて『竹林抄』の序文を次のように結んでいる。

拙き翁、今暫も老の波にたゞよひて命の露も存命る物ならば、続菟玖波集を集めん事を思へり。しからば、彼竹林集も諸家の打聞になずらへてさらに選り入れむといへる所しかなり。

文明六年の『萱草』にしても、かつて宗砌が自選句集『連歌愚句』を「新玉集二可被撰入候」と兼良に注進したように、撰集の資料として兼良に提出されていたのではないかと思われる。

東国から帰洛した宗祇が、『萱草』『竹林抄』を相次いで世に出したのには、老齡の兼良の在世中に何としても撰集の計画を実現してほしいという思いが強く働いていたと思われる。また、時を同じくして宗祇が後土御門天皇や都の貴族たちの注目を集めたのは、勿論、彼が並はずれた連歌の上手であり、『古今集』や『源氏物語』などの古典学を継承していたからであろう。またそれと同時に、彼が宗砌の後継者として、地下の側を代表する撰集の協力者と目されていたからではなからうか。

『竹林抄』に序を寄せた四年後、一条兼良は八十年の生涯を終え、『続菟玖波集』の撰集は実現しなかった。『菟玖波集』に続く准勅撰連歌集『新撰菟玖波集』が成立するのは、明応四年（1495）、宗祇七十五歳の年である。文明のころの宗祇は、あくまで兼良の協力者であり、撰集は兼良によって遂行されるべきものであった。しかし、『新撰菟玖波集』は、兼良の子冬良に序文を依頼しているものの、実質的な撰集作業は、種玉庵において宗祇を中心に進められたのである。

### 「宗祇法師画像」



（附图 8-42/ソ/1 貴別）

### 【参考文献】

- 金子金治郎 『宗祇の生活と作品』  
（桜楓社 1983）
- 奥田勲 『宗祇』  
（人物叢書 吉川弘文館 1998）
- 島津忠夫著作集第四巻 『心敬と宗祇』  
（和泉書院 2004）
- 木藤才蔵 『連歌史論考』上  
（明治書院 1993）
- 新日本古典文学大系 『竹林抄』  
（岩波書店 1991）
- （はせがわ ちひろ）



## 本探しは宝探し

大学院人間・環境学研究科修士課程1年 亀田 勇一

図書館や図書室には、誰からも忘れ去られた数多くの古い本が眠っています。時が止まったような書庫の中で、再び見出されるのを待っている本たち・・・特定の資料を目指してではなく、そういう本との出会いを求めて書架の間を歩くのは私の密かな楽しみでもあります。最近では電子化が進み、わざわざ足を運ばずとも済むことが増えましたが、それでも暇を見つけて図書を眺めているのはひとときの安らぎであり、温故知新という忘れかけた言葉を再認識する時間であると感じています。本稿では「利用者の声」ということで、そんな例を二つほど紹介したいと思います。

附属図書館には『片田文庫』という一群の図書があります。開架にあり、洋書と同等の規模を誇りながら何の説明もなく、全ての本に「片田清氏寄贈」と書かれている。おそらく多くの利用者にとっては謎のスペースでしょう。少し調べてみた処、片田氏は京都の高校で英語を教えていたようです。本の蒐集が趣味で家一軒が埋まるほどの蔵書があったそうですが、独身だったため亡くなった後に引き取り手がありませんでした。そこで、京大にたくさんいたかつての教え子達により全てが寄贈され、現在の姿になったということです。片田文庫の半分以上はKH(全集)で占めており、研究目的ならずとも眺めてみると面白そうな本が並んでいます。現代の作家はよく知りませんが、古典の有名なものは大抵揃っているのも、試験期には息抜きと称してこれらを読み漁ります。高校で半強制的に読まれた時には気付かなかった表現や心理描写の巧みさに感心し、自分が理学部生であるのも忘れて周りの人に薦めたのを覚えています。

もうひとつ、自分の専門分野の本と出会える

のが理学部動植物図書室です。この図書室の雰囲気がとても好きで、理学部にいた頃もよく足を運んでいました。まず扉を開けると、司書の方がにこやかに挨拶をしてくれます。しかしここからが他と違う点で、机や本棚の上、棚の空きスペースには貝殻や種子、様々な標本や生物の模型が所狭しと並べられ、どこか懐かしさを感じさせる不思議な空間になっています。開架の本は多くはありませんが、必要な図鑑類は一通り揃っているうえ地下の書庫には雑誌とともに古い書籍や非売品の図鑑等も収められていて、野外調査の前にも立ち寄りとなりがしかの収穫があります。ここでは自分の専門である貝関係のものしか探したことはありませんが、古い文献には研究以外に研究者の心得や生物の魅力を熱く語った文章が多く、本を開くのが楽しくなります。例えば、最近見つけた蝸牛の本では、海の貝に比して地味である蝸牛の魅力を侘び寂びの心と結びつけて切々と語っていて、貝の解説よりもこの文章に心血を注いでいるのでは、と思わせるものがありました。こんな本が最新の文献と隣り合わせで置いてあるのを見つけるのもまた、書庫内検索の楽しみといえるでしょう。

近年図書館のあり方は大きく変わりつつあります。必要な新しい文献がオンラインで手に入るようになる一方、それ以前のはこれまでと変わらず書庫に眠っていて、検索が相対的に面倒になるため足が遠のいてしまいがちです。しかしたまには、図書館に立ち寄って埃をかぶった本をめぐってみてはいかがでしょう。そのちょっとした余裕が、新たな発見につながることだって、あるかもしれませんよ。

(かめだ ゆういち)

## 基礎物理学研究所図書室紹介

基礎物理学研究所図書室 由本 慶子

基礎物理学研究所は、北部構内のグラウンド近くに位置しています。春には濃いきれいな花をつける2本の桜を従えた湯川博士像奥の湯川記念館も風情のある建物で、農学部表門や楽友



会館などと同じ設計者による建物と聞いています。その記念館隣の研究棟3階に図書室はあり、書庫からは

比叡山を眺めることができます。

当研究所は全国共同利用研究所の第一号として、国内外の基礎物理学研究者の研究にひろく資するように運営されています。図書室もその目的に従い、以前から利用対象者を限定せず、他大学所属の運営委員や研究会参加者等にも研究所構成員と同様の利用を認めています。例えば基礎研で開催される研究会の参加者は、期間中図書室資料の貸出や文献複写が可能で、実際利用も少なくありません。また、研究所では数日間程度から数ヶ月間滞在の研究員を全国から多数受け入れていることから、京大の図書室を利用するのがはじめての利用者が一年を通じて来られます。滞



在日数や求めている情報もまちまちな利用者にとって必要なサービスは何かということを考えて、カウンターに立つよう努めています。

図書室の資料構成は、理論物理学とその関連分野の資料が中心です。平成15年には所蔵目録データの遡及入力終了し、ネットワークを介して全ての図書の所在情報検索が可能になりました。それも数年前から遡及入力業務を主とす

る非常勤職員の雇用が確保できたからこそ可能になったことであり、遡及入力を図書室の電子化の基本と位置づけて下さった研究所内の理解の賜だと思っています。

遡及入力が一段落した現在取り組んでいる大きな作業としては、分類の付け替えが挙げられます。当研究所は平成2年に広島大学理論物理学研究所と統合されましたが、統合の際受け入れた約1万3千冊(図書)の資料については理論物理学研の独自分類がされており、基礎研のものとは分類系統が違っていました。これまで同じ主題の図書が2カ所に分けて配架されているという状況が続いており、利用者に不便をかけていました。それを改善すべく去年から広島大学の請求記号を付け替え、両者を混配する作業を進めています。

ここ数年資料の電子化が進み、図書館・室側のサービスも変化してきました。当図書室でも先に述べた遡及入力をはじめとし、電子化資料

の全学への利用提供や構成員への情報の提供など、図書室に足を運んで頂かないで済むようなサービスに力を入れてきています。と同時に、図書室に足を何度も運んでもらうようにするサービスについても同じく力を入れていかなければならないと思っています。どちらも利用者が図書館資料を有効に利用できる様な環境を維持する事にかわりはありません。今後も足を運んでいただかないで済むサービスと並行して、使いやすく心地よい空間・サービスを提供し、利用者に図書室に何度も足を運んでいただくのが目標です。

(ゆもと けいこ)

## 教官著作寄贈図書一覧

(平成15年9月～平成16年6月)

身 分	寄贈者氏名	寄 贈 図 書 名	出 版 社	出 版 年
総 長	尾池 和夫	大地：尾池和夫句集	角川書店	2004
名 誉 教 授	朝尾 直弘	京都雑色記録 1、2	思文閣出版	2003
名 誉 教 授	朝尾 直弘	朝尾直弘著作集1、2、3、5	岩波書店	2003 -
名 誉 教 授	河合 忠一	心筋症の話	中央公論新社	2003
名 誉 教 授	鈴木 仁美	Organobismuth chemistry	Elsevier	2001
名 誉 教 授	日沼 頼夫	医学の根っこ	勉誠出版	2003
名 誉 教 授	日沼 頼夫	医・薬を撃つ	勉誠出版	2003
名 誉 教 授	日沼 頼夫	ADULT T-CELL LEUKEMIA VIRUS 1-3	丸善	1988
名 誉 教 授	前田 達明	史料民法典	成文堂	2004
文学研究科	石川 義孝	The New Geography of human mobility inequality trends	Societa Geografica Italiana	2003
文学研究科	中務 哲郎	饗宴のはじまり	岩波書店	2003
文学研究科	中務 哲郎	物語の海へ ギリシア奇譚集	岩波書店	1991
文学研究科	南川 高志	Material Culture, Mentality and Historical Identity in the Ancient World	文学研究科	2004
文学研究科	紀平 英作	人文知の新たな総合にむけて「グローバル化時代の多的人文学の拠点形成」第一回報告書	文部科学省	2003
教育学研究科	川崎 良孝	図書館員選書31 図書館の歴史 アメリカ編増訂第2版	日本図書館協会	2003
法学研究科	棚瀬 孝雄	現代司法における専門家関与と市民参加	京都大学大学院法学研究科21世紀	2004
法学研究科	棚瀬 孝雄	東アジア社会の法と近代化	棚瀬 孝雄	2002
医学研究科	今中 雄一	医療の原価計算	社会保険研究所	2003
工学研究科	森澤 眞輔	アプローチ 環境ホルモン	技報堂出版	2003
工学研究科	吉川 恒夫	古典制御論	照晃堂	2004
農学研究科	岩井 吉彌	Forestry and the Forest Industry in Japan	UBC Press	2002
人間・環境学研究所	河崎 靖	オランダ語の基礎	白水社	2004
人文科学研究所	水野 直樹	生活の中の植民地主義	人文書院	2004
人文科学研究所	宇佐 美育	作家の恋文	筑摩書房	2004
人文科学研究所	山本 有造	「満州国」経済史研究	名古屋大学出版会	2003
人文科学研究所	竹沢 泰子	人種概念の普遍性を問う	京都大学人文科学研究所	2003
人文科学研究所	竹沢 泰子	New Wave Studies on Japanese Americans in the 21st Century	人文科学研究所	2004
国際融合創造センター	富田 直秀	ちゃっちゃんの遊園地	ゆみる出版	2003
国際融合創造センター	富田 直秀	心と科学と“こころ”	講談社出版サービスセンター	2002
留学生センター	蘭 信三	中国帰国生徒特別枠入試の意義と課題	京都大学留学生センター蘭研究室	2004
留学生センター	蘭 信三	「中国帰国者」の社会的適応と強制に関する総合的研究	京都大学留学生センター蘭研究室	2003
高等教育教授システム開発センター	溝上 慎一	現代大学生論	日本放送出版協会	2004

この一覧は寄贈者著作のみの掲載となっております。上記以外にも多くの図書を附属図書館や部局図書室にご寄贈頂きました。今後とも蔵書充実のため、ご寄贈いただきたくよろしくお願いいたします。

## 蔵書統計

(平成16年3月31日現在)

部 局	受入冊数			蔵書冊数			入力冊数		
	和書	洋書	計	和書	洋書	計	和書	洋書	計
附属図書館	9,634	1,423	11,057	576,557	270,203	846,760	312,794	86,076	398,870
附属図書館宇治分館	198	309	507	9,698	56,528	66,226	10,185	25,843	36,028
文学研究科・文学部	11,155	5,850	17,005	536,167	363,782	899,949	144,855	128,826	273,681
教育学研究科・教育学部	3,203	3,444	6,647	84,598	63,732	148,330	33,202	20,367	10,091
法学研究科・法学部	5,861	5,471	11,332	266,404	355,558	621,962	74,459	75,830	150,289
経済学研究科・経済学部	3,812	2,986	6,798	236,116	227,180	463,296	97,613	66,913	164,526
理学研究科・理学部	682	1,267	1,949	43,055	186,253	229,308	23,839	80,105	103,944
医学研究科・医学部	1,810	1,920	3,730	47,897	139,096	186,993	11,182	5,137	16,319
薬学研究科・薬学部	171	116	287	10,826	33,680	44,506	3,954	5,240	9,194
工学研究科・工学部	1,141	1,642	2,783	116,571	184,921	301,492	65,099	43,089	108,188
農学研究科・農学部	1,033	793	1,826	144,836	125,676	270,512	28,047	9,400	37,447
農学研究科附属農場	0	0	0	164	61	225	0	0	0
人間・環境学研究科	7,136	1,411	8,547	337,201	288,480	625,681	126,411	87,811	214,222
エネルギー科学研究科	161	50	211	3,548	4,309	7,857	2,453	1,473	3,926
アジア・アフリカ地域研究研究科	693	701	1,394	10,803	71,372	82,175	8,306	74,470	82,776
情報学研究科	349	378	727	12,637	53,294	65,931	9,329	24,728	34,057
生命科学研究科	1	2	3	24	5	29	0	0	0
人文科学研究所	5,779	1,737	7,516	452,904	77,039	529,943	74,216	19,882	94,098
再生医科学研究所	0	0	0	842	4,539	5,381	160	223	383
基礎物理学研究所	102	1,156	1,258	7,868	69,830	77,698	5,802	36,574	42,376
ウイルス研究所	0	0	0	328	6,938	7,266	112	1,204	1,316
経済研究所	122	1,509	1,631	39,893	35,213	75,106	13,647	18,407	32,054
数理解析研究所	172	1,015	1,187	6,419	71,605	78,024	5,457	39,813	45,270
原子炉実験所	34	300	334	12,284	32,779	45,063	8,017	7,053	15,070
霊長類研究所	326	577	903	6,859	14,964	21,823	4,993	4,641	9,634
東南アジア研究センター	756	7,760	8,516	24,125	119,446	143,571	17,283	62,913	80,196
学術情報メディアセンター	69	100	169	5,986	13,026	19,012	5,028	7,774	12,802
放射線生物研究センター	0	0	0	405	1,821	2,226	213	121	334
生態学研究センター	1,389	1,207	2,596	3,176	4,455	7,631	3,398	4,783	8,181
フィールド科学教育研究センター	190	68	258	12,439	7,789	20,228	4,351	1,654	6,005
環境保全センター	0	27	27	618	1,230	1,848	250	1,208	1,458
高等教育研究開発推進センター	310	52	362	2,307	941	3,248	0	0	0
その他	0	0	0	167	99	266	0	0	0
大学図書館	0	0	0	696	0	696	691	0	691
医療技術短期大学部	532	97	629	17,815	3,642	21,457	6,424	929	7,353
合 計	56,821	43,368	100,189	3,032,233	2,889,486	5,921,719	1,101,770	942,487	2,044,257

(注1) 附属図書館宇治分館は、化学研究所、エネルギー理工学研究所、木質科学研究所、防災研究所、宙空電波科学研究センターの蔵書数等を含めた数

## 図書館の動き

### 平成15年

- 12月 1日 東北大学出張者来館
- 2日 図書館政策委員会第2回幹事会  
平成15年度第3回商議会
- 4日 図書系連絡会議
- 12日 岡崎中学校生来館
- 19日 国立大学図書館協議会G I Fと  
画像伝送システムの活用研修会  
図書館政策委員会第3回幹事会

- 3月10日 東北大学出張者来館
- 11日 平成15年度第5回商議会  
徳島大学出張者来館
- 12日 図書系連絡会議
- 18日 大分大学出張者来館
- 4月 5日 全学ガイダンス(～6日)
- 7日 新入生オリエンテーション、留学生  
オリエンテーション(～13日)
- 23日 近畿地区国公立大学図書館協議会企  
画委員会  
近畿地区図書系課長・事務長懇談会  
国立大学図書館協会近畿地区協会総会
- 26日 図書系連絡会議
- 5月10日 図書系初任者研修(～13日)
- 26日 メディア・コモンオープニングセレモニー
- 27日 図書系連絡会議
- 6月10日 平成16年度第1回図書館協議会
- 24日 図書系連絡会議
- 30日 第51回国立大学図書館協会総会  
(～7月1日、於：阪大)

### 平成16年

- 1月 8日 一橋大学出張者来館
- 19日 図書館政策委員会第4回幹事会
- 30日 図書館政策委員会第5回幹事会
- 2月 2日 図書館政策委員会第6回幹事会
- 18日 図書館政策委員会第7回幹事会
- 19日 平成15年度第4回商議会
- 25日 Ms.S.Domier(マサチューセツ  
大学)来館
- 26日 東京学芸大学出張者来館
- 27日 愛知教育大学出張者来館

(京都大学図書館で行われた主要な会議、委員会、催し物を中心に掲載しました。)

## 目 次

図書館への想いをひとこと 第1回京都大学図書館協議会で	1
メディア・コモン( Media Commons )がオープン	3
和算から洋算へ	4
幕末の数学者 小野友五郎 日本の近代化を促した幕臣と和算家	8
谷村文庫蔵『萱草』『賦何船連歌』管見 連歌師宗祇 文明のころ	12
本探しは宝探し	16
基礎物理学研究所図書室紹介	17
教官著作寄贈図書一覧	18
蔵書統計	19
図書館の動き	20

#### 編集後記

巻頭の総長発言にもふれられているように、京都大学図書館協議会が発足しました。旧静脩編集委員会も、より全学的な図書館の広報を担う組織として附属図書館に広報委員会が発足し、その小委員会の一つになり、「静脩」編集小委員会として新たに出立します。「静脩」は全学的な図書館の広報誌として、今一番話題になっている事柄を取り上げて行こうと思っています。( 柗川 )